

三木の「義民伝承」について(1)

長谷川 奨 悟

〔抄 録〕

本稿では、現在の三木市(三木市民)にとって顕彰すべき「過去のお話」とみなされている義民伝承について、現在の「義民祭」を通じた顕彰行為の実践に対する様子を報告した。そして、地域誌としての義民伝承の歴史的経過への考察をおこない、現在のように語られるようになった地域的背景について明らかにした。そのうえで、三木の義民伝承がになってきた役割について検討している。

キーワード：三木市、義民伝承、過去のお話、義民祭、義民碑

はじめに

兵庫県三木市は兵庫県東播磨地域に位置し、平成30(2018)年3月末の人口統計データ⁽¹⁾によると、33435世帯、人口78100人の小都市⁽²⁾で、平成17(2005)年10月に隣接する美嚢郡吉川町と合併し、現在の市域(176.51km²)となった⁽³⁾。

三木市の中核をなす旧三木町域には、「三木義民」という義民⁽⁴⁾をめぐる伝承があり、三木市のWebサイトや記者発表資料などに、「豊臣秀吉の時代に与えられた地子免許の特権が、徳川幕府の延宝の検地令で取り消されそうになり、平田町大庄屋岡村源兵衛と平山町年寄大西与三右衛門の二人が命をかけて幕府に直訴し、特権が守られた。この義民の遺徳をしのんで、「夏の義民祭」を7月18日に本要寺(三木市本町2丁目3-6)で、「冬の義民祭」を12月8日に本長寺(三木市府内町6-43)で、毎年実施している⁽⁵⁾」(下線部は筆者の加筆)と紹介されるように、三木義民顕彰会が主催し、会長である三木市長はじめ幹部職員や市議会関係者の多くが参列する、7月17日の「夏の義民祭」(於：本要寺)、12月8日の「冬の義民祭」(於：本長寺)という2度の顕彰行為が毎年催されている。これには、それぞれ150名ほどの一般参集者が市内外から集まる地域の歴史をコンテンツとする観光イベント的な側面もみいだせる。

このように顕彰される三木地域における義民伝承とは、天正8(1580)年に終結する三木合戦後の復興政策として羽柴秀吉が与えた地子免許の特権について、近世を通じて試みられる三木町の特権保持・継続に関する支配者との折衝をめぐる「記憶」の継承の問題としてとらえられる。さらに、本要寺の義民碑(東播三木町弁証碑)にあらわされるように17世紀中頃の段階において、既に自明のものと思われていた自分たちの権利・利益が剥奪されようとした際に、三木町の総意としておこした訴訟を通じて地子免許の正当性を主張し、その特権維持を勝ち得たと

いう成功体験をもたらした平田町の大庄屋岡村源兵衛と平山町年寄大西与三右衛門の2名は「町の功労者」として位置付けられている。彼らは近代以降、現在の社会的背景により改めて「義民」として価値付けられ、その「過去」の成功体験の語りは、義民としてふさわしい物語へと変容していく。さらに、昭和初期の経済危機、大水害からの復興を一つの契機とし、町をあげた顕彰行為を継続的におこなうことで、発展拡張する地域の統合における紐帯としての「三木町民が共有すべき過去」、「金物の三木として発展する原点」という地域アイデンティティ醸成の源泉としての役割を過去の彼らに求めたといえる。その点でみれば、三木義民の顕彰行為は米屋(2005)や上杉(2009)などの議論があるように、常に現在における地域住民がいただく「歴史認識」や「過去意識」をめぐる問題であり、必要とされる「過去」の選択と活用の実践としてとらえられる事例といえる。

このような三木町における地子免許保持と義民に関する先行研究としては渡辺(2004)などがある。渡辺(2004)は、「創られた伝統」論(ホブズボウム1992)、「記憶」論(ノラ2000)を念頭に置きながら、各時期に示される三木における歴史叙述について、現在の伝承・儀式・資料保存の3つのあり方に着目しながら論じている。

そこで本稿では、現在の三木市(三木市民)にとって顕彰すべき「過去の物語」とみなされている義民伝承について、①平成29(2017)年12月および同30年7月に行なった参与観察から現在の「義民祭」の様子を報告すること。②地域誌としての義民伝承の歴史的経過をおさえること。そして、③三木地域における義民伝承が現在のように語られるようになった地域的背景を明らかにすること。④三木の義民伝承がになっている役割について検討するという4点を目的としたい。

I 現在の義民祭

(1) 三木の義民に対する顕彰行為の実践組織

現在、三木の義民をめぐる公の顕彰行為としては、先述したように7月17日の「夏の義民祭」/「義民祭「夏」まつり」(於：本要寺)、12月8日の「冬の義民祭」/「義民祭「冬」まつり」(於：本長寺)として三木義民顕彰会が主宰し、毎年夏と冬の2度おこなわれている。三木義民顕彰会は、昭和46(1971)年に義民祭の執行が三木地区区長協議会へと変更されたことを契機として、その前後に結成され顕彰事業として義民祭を引継ぎ主宰するようになったとされる⁽⁶⁾。同会は「岡村源兵衛重次、大西与左衛門勝家と、その他の三木義民の遺徳を敬慕し慰霊に並びに顕彰事業を行うことを目的」とし、その活動は、(1)義民の慰霊顕彰、(2)遺跡の保存並びに整備、(3)史実の調査研究、(4)その他本会の目的達成に必要な事業を行うこととされている。三木市長が会長を兼任し、三木地区区長協議会議長が実行委員長を務める。その

下に区長会から4名、両寺院から1名ずつ選ばれる6名の実行副委員長と、副委員長を含む17名の常任委員、若干名の委員によって構成され、事務局は三木市役所内に置かれている⁽⁷⁾。夏の義民祭、冬の義民祭ともに、市役所より当日の運営サポートとして職員が派遣されるようである。また、夏の義民祭当日は、三木市有宝蔵文書⁽⁸⁾の虫干し行事として、普段は蔵内に納められている文書が本要寺本堂にて一般公開されるため、文書管理の担当部署から職員が派遣され、古文書の出し入れなどの業務をおこなっている。

(2) 夏の義民祭

平成30(2018)年7月18日(水)の午前10時より本要寺義民墓(図1)および本堂において開催された「夏期義民祭」の式次第は次の通りである。司会進行は夏期義民祭代表(原善昭氏)によって進められ、当日は100名ほどの参加者があった。

午前10時、境内にある宝蔵の横に建立された義民碑「東播三木町弁証碑」の前に設えた祭壇の前に、三木市長、三木市教育長、市議会議員、各種団体の代表者、檀家、その他の一般参加者が参集し、墓前法要が営まれ、読経および焼香が行われた。

午前10時25分頃に本堂に移動し、三木義民顕彰会実行委員長の井上薫氏による開式の辞述べられた。その後に、本寺住職を中心とした僧侶たちによって読経(勸請 自我偈)が行なわれた。

午前10時35分頃、三木義民顕彰会会長の仲田一彦三木市長、および三木市議会議長の内藤博史氏より祭文が読まれている。市長による祭文では、①西日本豪雨のこと。②三木町が鎌倉時代より赦免地であったこと。③江戸時代の三木に2人の義民がいたこと。④訴訟の時に赦免地の証拠とされる秀吉制札が見つかり、江戸に届けられたこと。⑤訴えに勝訴し、三木町の地子免許が維持され、三木の町がこれ以降発展したたこと。⑥江戸時代以降、三木の町が金物産業の町となったこと。⑦現在の三木市長としての市政運営の責任について。⑧少子高齢化時代における三木市の方向性についての内容が語られている。

市長に続き三木市議会議長の祭文の大まかな要旨の通りである。①義民に対する慰霊の心をささげること。②延宝6(1678)年の訴訟のこと。③訴訟の勝利によって三木町民は喜び、生活が安定し、三木の町が発展していくこと。④三木町を救った義民を子々孫々まで受け継ぐべきこと。⑤義民のご加護によって現在の三木と自分たちの生活があることが語られた。

午前10時45分頃より読経(観音経)がはじまり、実行委員、市議会議員、県会議員、教育長、市役所市民生活部部长、区長協議会会長、区長協議会理事、区長OB会会長、元区長協



図1 東播三木町弁証碑
(2017年筆者撮影)

議会会長、三木老人会会長、古文書の会有識者、各区長、義民顕彰会功労者、本要寺代表、本長寺代表、義民遺族、各種団体代表、一般参集者の順番で焼香がおこなわれた。その間に、唱題、宝塔偈、回向と続き、焼香が終了すると祝電が披露された。

午前11時頃、僧侶たちが退出し歴史講話の準備が始められた。

午前11時5分頃、三木市長が退出し、歴史講話が始まり本要寺住職の挨拶、講師紹介があった。本年度は、藤原昭三氏による『『宝永の訴訟』について』であった。

午前12時5分頃、実行副委員長の岡本哲夫氏より閉式の辞があり、閉会となった。

法要終了後に、同寺客殿において参集者への食事(お弁当)が用意されていた。昼食後から午後4時頃まで、本堂にて虫干し行事として、普段は宝蔵内に収蔵されている近世三木町の古文書や絵図資料などが市役所職員によって本堂内に並べられ、結界の外から一般公開される。午前中の法要には参加せず、この虫干し行事のみに訪れる人も多いという。

(3) 冬の義民祭

平成29(2017)年12月8日(金)に本長寺において開催された「冬の義民祭」の式次第は以下の通りである。冬の義民祭代表の西山博史氏の司会で進められ、神戸新聞社など関係者を含む150名ほどの参加があった(図2)。



図2 2017年の冬の義民祭の様子(筆者撮影)

午後0時30分、三木市長、市議会議員、教育長、義民顕彰会などの関係者が本堂に参集し、法要が開始された。そこで、読経と焼香がなされた。

午後0時43分後頃、法要が終了し、関係者は本堂脇に建立されている大西与三右衛門の墓と義民碑(図3)の前に設えられた祭壇へ移動した。

午後0時47分頃、実行委員会副委員長より開催の挨拶。

午後0時50分頃、本長寺住職をはじめとする僧侶たちより勧請と読経が行われた。同時刻に「義民のうた」を披露する三木小学校の児童たちが本長寺に到着する。

午後0時55分頃、三木義民顕彰会会長の仲田一彦市長、三木市議会議長穂積豊彦氏により祭文が読まれた。市長による祭文の要旨は以下の通りである。①三木の義民への追悼。②三木町が繁栄した要因は「地子免許」であり、危機に



図3 本長寺境内の大西与三右衛門の墓と義民碑(2017年筆者撮影)

守り抜いた過去の「義民」のこと。

③幕府への訴訟という死の危険を顧みない郷土愛にあふれた大西与三右衛門と岡村源兵衛の行動への賛辞、三木市民は彼らの子孫であること。

④衰退傾向にある中で、義民の志しを現在の三木市の活力にすること。

⑤過去の義民に恥じない市政運営を行うことである。



図4 三木小学校児童による義民のうた(2017年筆者撮影)

次いで述べられた三木市議会議長の要旨は次の通りである。①三木町が鎌倉時代よりの赦免地であったこと。②延宝の検地のおりに、訴訟による地子免許の維持がなされたこと。③地子免許のおかげで町が安定し、繁栄したこと。④現在の私たちが義民の偉功を次世代に伝えていくことである。

午後1時05分頃、徳澤秀撰氏による吟詠「三木義民伝」が奉納される。

午後1時10分頃、参加者全員を対象とした焼香がはじまる。焼香中は読経が続けられ、回向と続いた。

午後1時27分頃、県議会議員などからの祝電が披露される。

午後1時30分頃、三木小学校児童による「義民のうた」が奉納される(図4)。

午後1時35分頃、義民顕彰会実行委員長藪西利幸氏より謝辞があり閉会となった。

午後13時55分頃、境内の義民祭祭場が撤去され畳が敷かれ、柔道着を身に着けた児童たちがウォーミングアップを開始する。

午後14時05分頃、読売新聞の後援による義民祭奉納武道大会が開催された。

Ⅱ 近世における地子免許をめぐる折衝

(1) 近世三木町と地子免許

美濃川の左岸を中心に展開した近世の三木町は、戦国期に東播磨8郡の守護職であった別所氏が築城・拠点とした三木城の旧城下町を基とし、城の周囲には姫路と有馬を結ぶ有馬街道など5つの街道が通る交通の要衝であった(伊賀2016)。天正6(1578)年から同8年にかけて毛利方に与した別所氏と羽柴秀吉を中心とする織田方の間でおこなわれた三木合戦によって城下町は荒廃したとう。秀吉は三木合戦終了後に、その復興策として地子免許・諸役免除の特権を認める制札⁽⁹⁾を三木町に発給したとされる⁽¹⁰⁾(三木市教育委員会2013)。

近世の三木町は、町方10ヶ町と地方8ヶ町によって構成され、地子免許地とされた町方10ヶ

町は、上五ヶ町(大塚町、芝町、東條町、平山町、滑原町)、下五ヶ町(新町、上町、中町、明石町、下町)を、この両町でさらに惣町を形成していた(図5)。このうち、計514件が地子免許の対象者であったという。慶長5(1600)年の池田輝政の姫路入封により姫路藩領となり、元和1(1615)年の一国一城令にともない三木城は破却されている。その後、小笠氏の明石入封にともない明石藩領となり、三木町の侍屋敷に家臣団が一時入居したが、同6年に明石へ移住したことにより、三木町は小城下町から在郷町⁽¹¹⁾へ転換したとされる。近世中頃には町方10ヶ町の町域が拡張し、寛保2(1742)の『三木町諸色明細帳⁽¹²⁾』によると、商工業に従事する世帯数が54%を占める総戸数613戸人口3854人の商工業都市であったといい、陣屋など領主の出先機関が置かれた町であった(伊賀2016)。惣町としての三木町は、当時から幕末まで2つの組合町・10の個別町という仕組みが出来上がっており、都市としての規模は小さいものの、行政制度の構造は近世の都市として典型であるとされる(渡辺2004)。近世を通じて3期84年が幕府領、187年間が大名8家10藩の私領とされ、幕府領時代の長さで領主交代のめまぐるしさ、遠方大名領の飛び地支配であった期間の長さという3点に地域支配の特徴があるという(三木市教育委員会2013)。

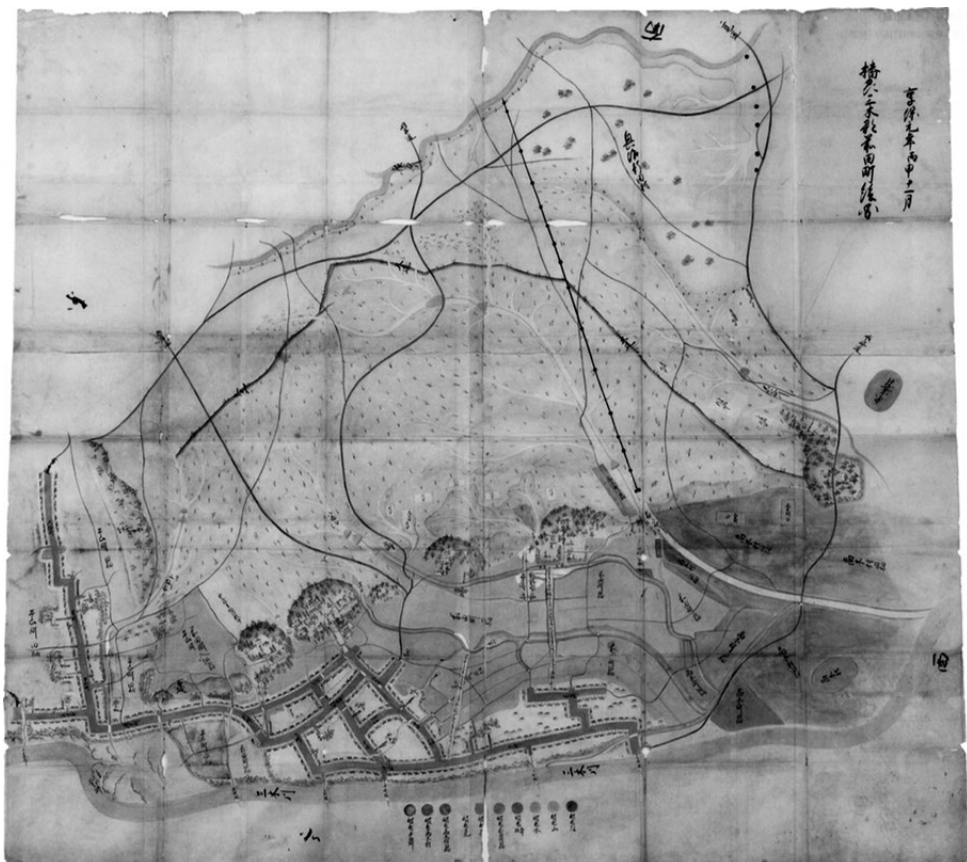


図5 「播州三木郡前田町絵図」 三木市有宝蔵文書、原寸 145cm × 159cm

経済面では、18世紀中頃から地子免許の特権の恩恵を背景に、三木町に集住し、出稼ぎを中心に畿内一円で活躍した三木大工との交流により、大工道具の生産が始まったとされる。天明年間(1781-89)頃には、大工道具生産が飛躍的に拡大し、鍛冶職も急増する。享和4(1804)年には江戸との直接取引をおこなうなど、販路を全国に拡大し特産地としての地域を得る。化政期(1804-30)頃には全盛期を迎えたと指摘されている(桑田2010)。

(2) 地子免許をめぐる三木町人の対応

近世三木町は、元和7(1621)年の明石藩主小笠原忠政による最初の地子免許状⁽¹³⁾の交付以降、領主替えの度に地子免許状(後に無年貢証文と諸役免除)の請願・交付され、地子および諸役が免除されることになった。この地子免許の特権の保持は、第2期幕府領時代(1642-1688)に一度目の危機を迎えている。現在において語られる三木の義民伝承は、この出来事と顛末をめぐる物語が原型とされる。延宝5(1677)年、検地(延宝検地)の対象地の中に三木町屋敷が含まれていたことで、三木町は、その確認を求め江戸への訴訟を決定している。翌年、平田町庄屋岡村源兵衛と平田町大年寄大西与左衛門の2名が惣代として江戸へ出訴、幕府に三木町の地子免許を確認させることに成功し、三木町へ帰参する(延宝訴訟)。この時に証拠物件とされたのが、先例とされた小笠原忠政・水谷勝隆による地子免許状⁽¹⁴⁾と、この時「発見」された羽柴秀吉制札であったという。翌7年に幕府より、検地帳の末尾に前例同様に地子免許の維持を認める旨が記載された『三木町屋敷検地帳⁽¹⁵⁾』が交付されたことで地子免許が維持されることとなった。訴訟の経験から、秀吉制札はこの後、三木町が地子免許を有する由緒として位置付けられ、元禄7(1694)年に秀吉制札を保管するための蔵(宝蔵)が惣町の総意(10ヵ町の費用軒割り負担)で、本要寺境内に本堂と向かい合うように建設されたという。

次いで2度目の危機が訪れるのが宝永4(1707)年に新領主となる下館藩黒田家の時代である。下館藩では、翌5年、先例を見直し「地子銀」の賦課、および町代表者の江戸出頭を命じている。三木町はこれに対応するため、翌6年に家老に宛てた願書を惣代3名に託し訴訟をおこしたが、敗訴となり地子銀が賦課された(宝永訴訟：1708年)、領主への再願(正徳訴訟：1711年)が認められ地子(無年貢)免許⁽¹⁶⁾を獲得している。これにより、このときの総代3名も後に「義民」顕彰の対象となっている。ここで、三木町の対応として注目できるのが、宝永訴訟を進めるにあたり過去の延宝訴訟をめぐる記憶が想起され、宝蔵の前に義民碑「東播三木町弁証碑⁽¹⁷⁾」が三木町の総意として建立されたことである。ここではじめて、過去の訴訟によって地子免許の維持という成功体験を町にもたらした岡村源兵衛と大西与左衛門の2名が三木町民によって「功労者」として公式に顕彰されたといえる。これ以降、三木町は法制度上の位置づけは「地方」とされ、町全体が年貢地・無年貢地の扱いを受けるようになるが、結果的に地子免許(無年貢地)は明治まで維持されていくこととなった。

(3) 近世における位置付け

三木の義民を顕彰する「夏の義民祭」が開催される吉祥山本要寺とは、三木市本町2丁目に所在する日蓮宗寺院である。天正8(1580)年三木合戦集結時に、織田方が拠点の中心とした平井山本陣から秀吉が戦災を免れた本寺に本陣を移し、戦後処理をおこなったことから、三木町内の各宗寺院の主席に命じられたという(三木市教育委員会2013)。近世には、町民の集会所として利用され、延宝の訴訟を起こすために、後に義民とされる岡村源兵衛と大西与左衛門が江戸に向けて出発したのも本寺であったという(福本1989)。同寺境内には、元禄7(1694)年に三木町の地子免許の由緒を示す最も重要な宝物である秀吉制札を保管するための蔵(宝蔵)が町民の総意によって本堂前に建設された。この宝蔵建設事業⁽¹⁸⁾について、本要寺境内に宝蔵が建設されたことは、三木町が地子免許であるという「伝統」の維持装置が創出されたことを意味する(渡辺2004)。元禄16(1704)年には、小笠原・水谷氏(先代領主)発給地子免許状、延宝の検地帳が追納され管理されるようになる。その後宝永4(1707)年に現在義民碑と呼ばれる「東播三木町弁証碑」が建立されている。このように、18世紀初頭において、本要寺境内には延宝訴訟に勝利し、地子免許が維持されたという成功体験をモニュメントとして可視化し、三木町民が「自分たちの過去」として共有するための場所が整っていた。

渡辺(2004)は、『三木町御免許大意録』(黒田清右衛門家蔵)の写本にみられる公式な歴史叙述とその構造について、「創られた伝統」論(ホブズボウム1992)、「記憶」論(ノラ2002)を念頭に置きながら、現在の伝承・儀式・資料保存の3つのあり方について、次のように指摘している。一度目の訴訟をおこした延宝5(1677)年に「秀吉によって認められた地子免許」という伝統が創造され、領主交代の折に地子免許維持請願が繰り返されることで「制度化」する。三木町民に「伝統」と当町の特殊性を視覚的に再認識させる装置としての(1)「宝蔵」。伝統維持の慣習化として制札・免許状の(2)「虫干し行事」。江戸訴訟に向けた三木町統合の象徴として(3)「義民碑」が存在していた。そして、実はこの3つが短期間の内に整備され、創られた伝統を確立させた。そのなかで構築される町公式の歴史叙述(由緒)が伝統を記録化・定着化させていったという。

特定の過去を視覚的に可視化する義民碑(Monument)は、三木町にとって重要な共通の出来事を想起させる装置の役割を果たす。近世の三木町にとって重要なのは、自明のものと考えられていた地子免許の保持が危ぶまれたとき、先例(由緒)を根拠として、町として領主に訴訟を起こし、難儀をしながらもその訴えが認められたという、町としての成功体験であった。その立役者が、秀吉制札・2通の地子免許状・延宝の検地帳であり、江戸へ出訴した総代たちはその功労者として位置付けられていた。しかし、この延宝訴訟をめぐる成功体験という三木町の共同の「記憶」は、元禄期に始まったとされる「虫干し行事」の場において想起されるものであった、虫干し法要こそが三木町の「伝統」維持の儀礼行為であり、町民代表者の総出としての行事の継続と宝蔵の「荘厳」化が記憶の強化・共有化に重要であったとされる(渡辺2004)。

ことに、三木町の行政文書である宝蔵文書のうち「三木町弁証碑銘写」や、村方旧記として位置付けられる『三木町御免許大意録』以外には、平田町庄屋岡村源兵衛と平田町大年寄大西与左衛門の2名の実名はみられない。彼ら自身への顕彰行為は、与左衛門の100回忌に当たる享和1(1801)年11月6日に、虫干し行事の興隆の一環として、本要寺において彼らの追善供養が単発でおこなわれたにすぎない。

近世三木町における地子免許の特権の保持は、先述したように三木町に集住し出稼ぎの形態で活動していた三木大工などのような実益を享受し得たのみならず、例えば、延享2(1745)年に三木町より役所(代官所)に提出された「町方地方差別之訳言上書控⁽¹⁹⁾」や、同じく同3年の「大年寄由緒書上控⁽²⁰⁾」などの文書に見られるように、町としての地子免許の保持は、それをもたない近隣の村々とを差別化する根拠として利用され、三木町の地域的優位性(格式)を主張する言説として用いられていた。

近代に始まり、現在まで開催される夏の義民祭は、近世三木町の地子免許特権の折衝と成功体験という、三木町の町民意識の紐帯となりえる共同体としての「過去」を想起させる共同空間と結びついたものであった。

Ⅲ 近代における「義民」としての再顕彰

(1) 義民化される過去の物語

明治6(1873)年の地誌改正は、近世において支配者との折衝を繰り返しながら維持され続けた実益としての地子免許の特権を失うだけではなく、特権があるが故に主張してきた三木町の優位性を低下させ、他所との差別化や町民意識をまとめあげるために様々に利用されてきた言説の効力を失わせることとなった。これにともない、三木町における地子免許の保持という「伝統」を支え、制度化してきた宝蔵の維持管理や虫干し行事といった実践はその必然性と意味を低下させ、その位置づけを変化させるように歴史叙述が変化するという(渡辺2004)。

明治44(1911)年に成立したとされる『三木町赦免地の由来』(写本：本要寺蔵)では、近世三木町における歴史叙述のパターンにはみられなかった貝屋(大西)与三右衛門と山崎屋(岡村)源兵衛という名前が最初に示された後、本要寺の弁証碑の状況を簡潔に記述した後、彼らの行動を義民の偉業と位置付けている(渡辺2004)。その後に、延宝訴訟のため江戸に出発する2人の行動がより詳しく、かつ義民にふさわしくドラマティックに叙述されているという。ここで初めて、近世において地子免許保持の功労者として位置付けられていた彼らが、三木町の危機を救うため死を覚悟して江戸に向かったという物語が創造されたことになる。この記述が創作された背景には、佐倉惣五郎物語をはじめとする義民物語の流行(保坂2006)や、日本全国規模で展開される自由民権運動期における各地の義民顕彰の影響があるという(羽賀1998)。明治40年

—義民のあしあと— 早乙女秀鳳画

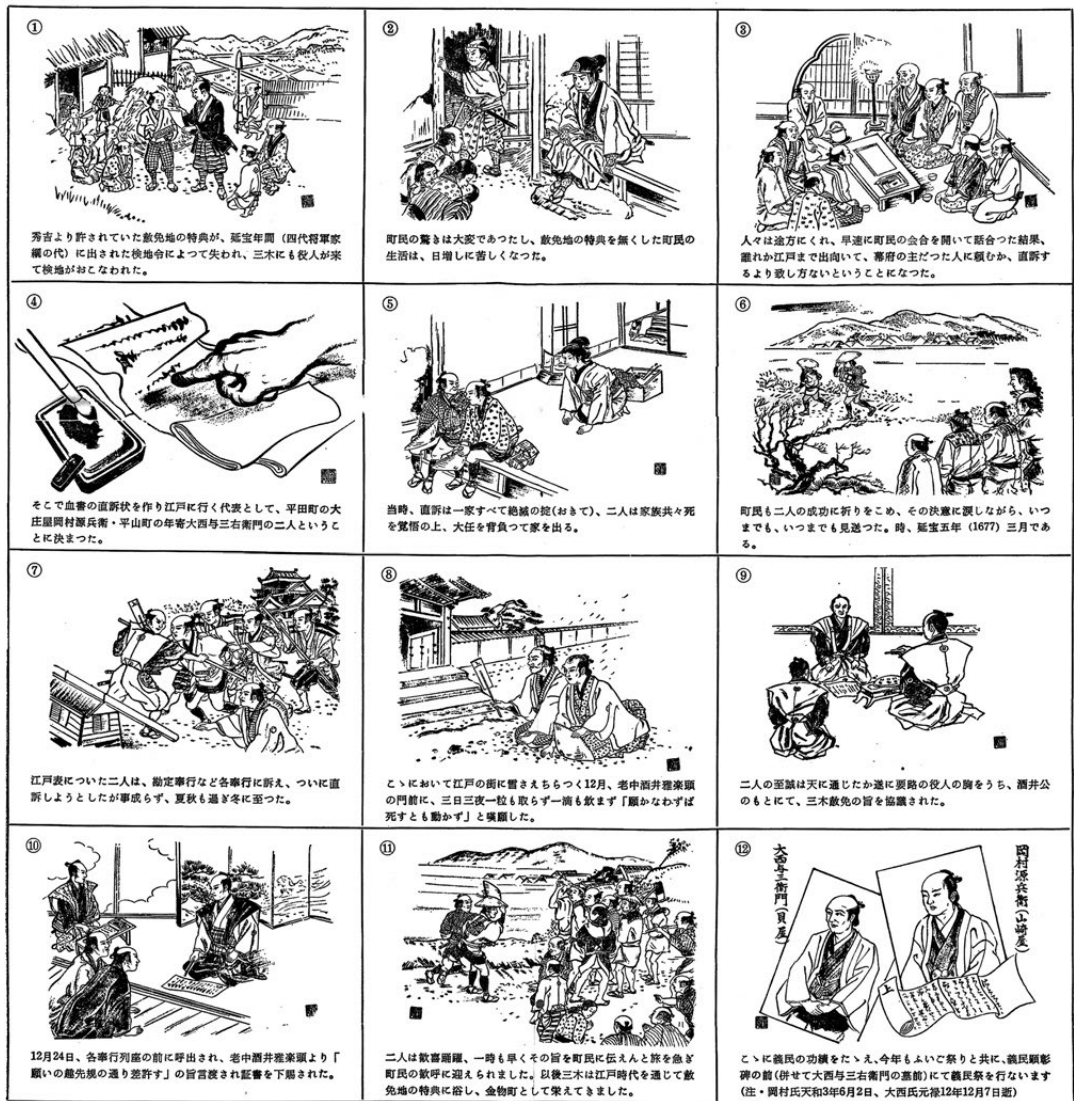


図6 早乙女秀鳳筆「義民のあしあと」（冬の義民祭ポスターより一部抜粋 昭和50年代） 個人蔵

代に創造された三木の「義民」をめぐる物語は、大正15(1926)年に発行された『美濃郡誌』において強化され、叙述されたことで「公式な記憶」となったことで創作が戦後に引き継がれていく条件を整えた」と渡辺(2004:167)と指摘する。そして、宝蔵と弁証碑が名所旧跡の1つとして認識されたことで、幕末における「創造された伝統」の「観光化」の延長線上に位置付けられるという。

昭和4年(1929)からは、本要寺での義民をめぐる顕彰行為の町長黒田清右衛門がイニシアチブをとるようになり、翌年から虫干し行事が盛大化、翌6年から町長主催へと変更される。昭和初期の恐慌克服への対応を進めるにあたり、改めて義民をめぐる物語が想起され、その物語が聴衆に披露されたように、当時の時代状況と結びつけて、「郷土」の歴史から教訓を得るた

めに「訓話」がはじめられている(渡辺2004)。その後、同8年頃には、郷土史家で『美囊郡誌』や『三木町水災誌』などを執筆する小坂恒三郎による義民に関する歴史講話など、地域の歴史を語る場として機能をもち、義民顕彰とは無関係な「余興」として万歳や播州音頭などが興じられ、法要はイベント化していくという。また、外部講師として地元出身の軍人を招いた軍事公演や『海の母』など国策紙芝居を披露するなど戦争体制へ接近していくようになる。

また、昭和5(1930)年に郷土教育運動の一環として編纂がおこなわれ三樹小学校編『郷土調査』、昭和8年の『三木町水災誌』に三木の義民をめぐる物語が叙述されたことで、小学校における郷土教育に活用されていくこととなる。このように、近代三木町における義民をめぐる物語は、郷土史家たちによって創造され、雄弁に語られ、初等教育に組み込まれていくことがわかる。ここで創造された物語は戦後、郷土史家であった早乙女秀鳳画「義民のあしあと」(昭和50年代頃：図6)やコタニマサオ氏などによってイラスト化されたことで、視覚イメージとしても定着していったことがわかる。現在、本長寺における「冬の義民祭」において奉納される三木小学校児童による「義民のうた」は、昭和46(1971)年につくられたもので、ふるさと学習(郷土教育)カリキュラムの一環としての地域行事への参加の実践であるという⁽²¹⁾。ただし、旧三木町内にある三樹小学校では「義民のうた」は学習しないといい、本長寺が含まれる上五ヶ町を中心とする学区内で行なわれるローカルな郷土教育の実践として評価できる。

また、現在の三木市のウエブページに掲載されている三木の義民伝承に関する記述、義民祭における祭文の内容は、このときに創造された物語に基づくものであり、現在でも市の公式見解として扱われていることがよくわかる。

(2) 「冬の義民祭」の成立とその背景

昭和8(1933)年12月8日から「冬の義民祭」(於：本長寺)が開始されている。本長寺とは、上五ヶ町の内、三木市府内町にあり、天正9(1581)年に開かれた本門法華宗寺院である。本寺開基の入道承慶は、加古弥七郎という別所長治の家臣で、三木合戦の折りに秀吉から武勇を評価され、大西の性と母衣、九枚笹の家紋を授かったとされる人物で、三木合戦終了後に仏門に入り本寺を創建した(福本1989)。義民の1人である大西与三右衛門はこの分家の子孫とされており、本寺には与三右衛門夫婦の墓が存在している。本来は境内の別の場所にあった墓は、冬の義民祭が開始された翌年に本堂横の現在地に移転されたという。また、墓の隣には昭和27(1952)年に建立された義民碑が確認できる。このように、本長寺は、大西家と縁が深く与三右衛門の墓の存在することから、顕彰対象の人物そのものに由来する形で「義民」を顕彰する場(空間)が昭和初期から意図的に整備されていった可能性が高い。

その1つの要因に、昭和7(1932)年7月に発生した大水害が考えられる。ここでは、近代の三木町を代表する地域名望家であった玉置家に収集・蓄積され続けていた「玉置家文書⁽²²⁾」に残された資料群などから本長寺が顕彰空間として整備され、「冬の義民祭」が開始された地

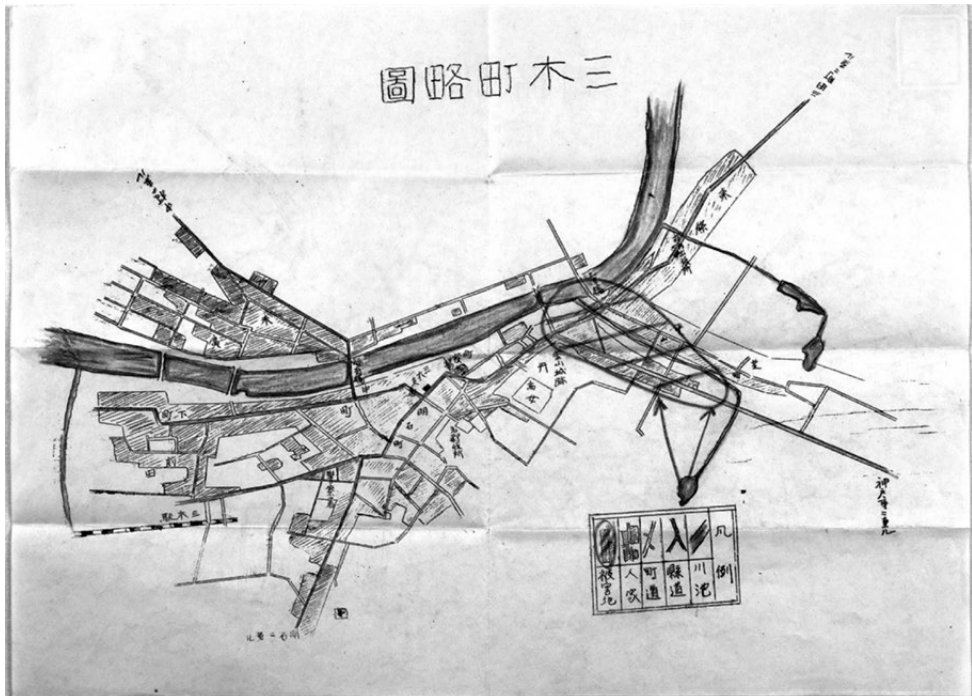


図7 昭和7年大水害の被災状況速報(三木市有玉置家文書1-9付図)



図8 「水害記念絵葉書」(二位谷池：三木市有玉置家文書絵1-9)

域的背景について考察する。

昭和7年に発生した大水災は、7月1日より発達した梅雨前線により大雨が降り続いたことで、翌2日未明に上五ヶ町の背後にあった二位谷池などのため池が決壊したことで発生した土石流が谷川を奔流して流路沿いの芝町、平山町、下滑原町を襲いながら美濃川に流れ込んだものであったとされる⁽²³⁾(図7)。この時

の被害状況は、神戸又親日報⁽²⁴⁾などの新聞でも連日報じられ、三木町では各区長宛てに被災調査と報告が町より指示され、「昭和七年七月三木町水災義捐金分配表⁽²⁵⁾」がとりまとめられている。これによると、被害戸数100戸、死者は33名となっており、三木町では約一週間後に、三樹小学校において町主催の合同葬儀が開催されている⁽²⁶⁾。この水災による被災状況は写真に収められ、昭和8年7月に三木城本丸内に建立される「水害犠牲者慰霊碑」⁽²⁷⁾などと供に「水害記念絵葉書」(図8)として刊行されたほか、『三木町水災誌』の口絵(図9)にも使用されている。このように、水害被害からの救済、復興、顕彰は町をあげておこなわれていることがわかる。また、三木町長池田喜蔵は、この水害からの復興にあたり、郷土史家の小坂恒三郎

に対して、①水害状況の記録化。②復興作業の記録化。③郷土意識の高揚を図ることを目的とする、『三木町水災誌』の編纂を依頼し、翌年に三木町役場から出版されている。恒三郎が『三木町水災誌』での叙述において、被災状況や復旧作業の様子などを記録するほかに多くの分量を費やしたのが、三木町にける郷土誌としての三木合戦と義民伝承に関する歴史叙述と教育の重要性であった。



図9 小坂恒三郎『三木町水災誌』の口絵写真

つまり、町長や恒三郎らは、災害復興の起爆剤として「三木合戦」と「領主別所長治の功績」、「義民伝承」という、過去の記憶を想起させ、郷土意識を積極的に利用することで、三木町民の共同体意識の昂揚を計ったといえるだろう。恒三郎による『三木町水災誌』を媒体とした義民伝承の発信は、復興作業や義民祭のなかでの中で町民間に共有されていくことから、近代の義民伝承の定着化と捉えることができよう。

(3) 近代における義民の位置づけと顕彰行為の実践

近代における三木の義民顕彰は、近世以来の地子免許特権の保持という「伝統」を町民がそれを弁証する物的証拠を視覚に再確認し、「過去」を共有する目的から義民物語を中心とする内容へとその意味を変更された。そして、行政主催の夏の義民祭の盛大化やイベント化、社会的、あるいは政治的思惑の付与を背景に、昭和8年に前年の大水害を克服するための共同体の確認手段として冬の義民祭が開始され、旧市街地の町内会、周辺部に展開しはじめた新市街の町内会を巻き込み、行政区画としての町民による顕彰実践へと変化していったといえる。

K. フット(2002)は、過去が顕彰に値するまで顕彰行為は生じないことを指摘し、地域アイデンティティの強化が求められる時期に、必要な「過去」が呼び起こされ、現在の文脈で利用されるという。夏の義民祭は昭和初期の恐慌への対応、そして戦時体制への移行期の社会的文脈の中で利用されたといえる。そして、上五ヶ町を中心とする大水災からの復興という時期に、地域意識高揚のためという同時代の文脈で「義民」として価値付けられた物語が強化されたのであり、『三木町水災誌』や新聞メディアを通じて定着が計れ、実際に「冬の義民祭」という形で顕彰行為が意図的に実践されたものであれば、フットの指摘を援用しながら解釈できる。本長寺は、甚大な被害がでた上五ヶ町のなかにあって被災を免れたこと、大西与三右衛門の墓がある場所であったため、義民顕彰行為の会場として注目され、与三右衛門という義民の存在に基づく「共通の過去」を視覚化するため、物質性を持つ「墓」が本堂横に参拝者の眼に見え

る形で移築されたと考えられる。そして、このように設えられた空間において開催される義民祭は、地域的紐帯としての義民伝承、当該地区にとっての共通の過去を語る場、その語りを共有する機会として利用されていくのである。

玉置家文書には、戦前・戦後の時期に「義民祭」の開催を知らせる通知文が数点確認できる。例えば、三木町長池田喜蔵の名で発翰された、7月18日に本要寺において「町功労者追悼会執行」を開催する旨の昭和13(1938)年の告知文⁽²⁸⁾が、また翌年に三木町長池田喜蔵の名で各区長宛で発翰された12月8日に本要寺での「義民貝屋与左右衛門追悼会案内」の告知文などが確認できる⁽²⁹⁾。前者は現在の本要寺における「夏の義民祭」、後者は本長寺の「冬の義民祭」にあたり、町の行事として義民への顕彰行為の実践を行っていたことがわかる。

また、昭和25(1950)年7月14日発翰された「町宝蔵虫干について」では、三木町長堀田光雄の名で各町会議員、各団体長、各学校長、その他各位宛に告知文が出されているのに対し、同日付の「赦免地功労者追悼会について」では、町長名ではなく、本要寺住職小谷恵進の名で各遺族、各寺院住職、各町会議員、各団体長、各学校長宛で前者に同封されているのを確認できる⁽³⁰⁾。後者には、「縦前町主催にて執行されていました赦免地功労者追悼会を本寺主催にて…」と追悼会の主催者が変更された旨が記されている。つまり、戦前は7月18日にいづれも三木町主催で執行されていた午前中の追悼会(義民祭)と午後の法蔵文書の虫干行事が、近世以来の文書管理の伝統をもつ虫干し行事はそのまま町主催とされ、追悼会という法要の執行は本要寺へと移管されたことがわかる⁽³¹⁾。戦後のある時期まで、義民をめぐる顕彰行為は「追悼会」と称され、「義民」とされる過去の人たちも「町功労者」という呼ばれ方もされていたようである。これが、いずれかの時点で、「義民」という名称へと一本化され、「追悼会」は「義民祭」へと公式に変更されたと考えられる。しかし、三木義民顕彰会結成以前の顕彰の状況について示す資料の収集、聞き取りが十分に進んでいないため、義民祭をはじめとする顕彰行為を実践してきた組織の実体は不明なところが多く、この点は今後の課題としたい⁽³²⁾。

Ⅳ 義民伝承という「記憶」と「過去」の役割

三木市民に「三木義民」として伝承され、義民祭を通じて顕彰行為が実践される過去の物語について、語り継がれる「地域的記憶」の観点から整理すると以下のようにまとめられる。

まず、本伝承の要因(記憶の源泉)は、三木合戦からの復興施策として羽柴秀吉が三木町に地子免許の特権を与えて地誌と諸役を免除したことにはじまる(要因の発生)。そして、明石藩主小笠原氏が地誌免許状など、近世の領主たちは前例を踏襲するように三木町の地子免許を認めてきた。これによって18世紀後半には、特権を有する三木町民にとって半ば自明のものとして認識されるようになり、町として地子免許をめぐる記憶を顧みるような行為がおこなわれた形

跡はない。

その後、延宝検地の際に、自分たちの特権が剥奪の危機に瀕した時に、三木町の由緒(先例)を根拠に平田町の大庄屋岡村源兵衛と平山町年寄の大西与三右衛門を代表者として三木町として領主(幕府)へ訴訟を起こし、難儀をしながらもその訴えが認められたという、町をあげた成功体験を経験した。この時点で、地子免許特権の維持に関する最初の記憶が生成されたといえる。この時、三木町では地子免許をめぐる最大の根拠である秀吉制札の紛失という失敗体験から、これらの物的証拠を町の宝として保存するための宝蔵が元禄7(1694)年に町の総意で建設され、管理と共有化が始められる。しかし、この成功体験も三木町民にとって「共有すべき重要な記憶」とはなり得ず、時間が経つにつれ、村方旧記にみえるように半ば自明のものとして省みられることはなく、町としての成功体験の記憶は忘却の方向へ向かっている。

宝永4(1707)年の領主交代にともなう下館藩黒田家による先例の見直しにより、地子免許地が課税対象となる事態が生じ、地子免許の特権が危ぶまれたとき、町として対処を行うにあたり、延宝訴訟における成功体験という記憶が地域的紐帯の意味合いを帯びて想起され、共有すべき記憶の可視化を目的に「東播三木町弁証碑」(Monument)が建立された。ここには、秀吉によってもたらされた地子免許と延宝訴訟により地子免許を維持したという成功体験が叙述されたほか、前領主であった別所家による統治時代から続く伝統であると由緒付けられることとなった。この時点で、町として共有すべき成功体験の記憶は発見されたととらえられる。この延宝訴訟の記憶は、由緒となる物的証拠の視覚的共有化を目的とする「虫干し行事」のなかで語られるべきものであり、この記憶は宝蔵や行事の荘厳化のなかで緩やかに制度化されていく。成功体験をもたらした源兵衛と与三右衛門に対する顕彰行為は、享和1(1801)年11月6日に、虫干し行事の一環として、彼らの追善供養が単発でおこなわれたにすぎない。このことから、近世段階において重要なのは、秀吉制札、2通の地子免許状と幕府から下された延宝の検地帳こそが立役者であり、江戸へ出訴した総代たちは、結果をもたらした功労者としての位置付けられることである。

社会状況が大きく変化した近代初頭には、三木町にとって様々な面で重要な意味を持っていた地子免許を喪失したことで、その記憶は忘却されていく。その後、上記の功労者たちは明治末期の社会的文脈によって再び発見され、彼らは町のために命をかけた「義民」としてとらえられ、近世には見いだせない彼ら主体の義民物語が創出されている。この義民物語は、『美囊郡志』などを通じて公表され、昭和初期の経済危機や上五ヶ町を中心とする大水害への対応に面したとき、さらに、現在の社会的文脈から共有すべき過去として表面化され、周囲の町内会を取り込みながら地域的紐帯としての意味合いを深めて語りが強化されたといえる。現在の年2回の義民祭を通じた顕彰行為の実践へと再構築され、各時代の社会的背景によって変化しながら継続的に実施され続けることで、制度化されていったといえる。この点で、顕彰すべき過去の記憶の継承は、「要因の発生」→「忘却」→「生成」→「忘却」→「発見(功労者として可

視化)」→「緩やかな制度化」→「忘却」→「再発見(義民化)」→「再構築」→「制度化」→「現在」という流れになる。

現在における三木の義民伝承は、拡張される三木地域の民俗誌のなかで構築と編成を経て継承されたものであり、観光や地域教育の場面で利用され、地域遺産としての重要な「場所の過去の物語」となっている。

おわりに

三木の義民伝承は「地子免許を守った町の功労者が、本来的な「義民」に該当するか?」という実態への探求では無く、近代に「義民」と認定され、一つの「伝統」として80年あまり続けられてきた顕彰行為、「場所の物語」へのまなざしに面白さがあり、伝承の意義がある。本稿では、現在の三木市(三木市民)にとって顕彰すべき「過去の物語」とみなされている義民伝承について、①現在の「義民祭」の参与観察を報告すること。②地域誌としての義民伝承の歴史的経過をおさえること。そして、③三木地域における義民伝承が、現在のように語られるようになった地域的背景を明らかにすること。④三木の義民伝承がになっている役割について検討するという4点について検討してきた。これにより、三木市民による義民をめぐる顕彰行為の現状状況把握、過去から現在までの地域誌の中での義民伝承をめぐる言説やその意味の変化について明らかにできた。

しかし、義民をめぐる研究史の整理やそのなかでの三木義民の位置付ける作業、三木の義民に関する伝承を事例とした、文化地理学や地理思想研究における「記憶」や「場所感覚」をめぐる研究史への位置付けとその評価は十分におこなえていない。これらは今後の課題とし、別稿を用意したい。

〈附記〉

本研究を進めるにあたり、所蔵資料を提供くださいました三木古文書塾の進藤輝司氏、お話を伺いました本長寺義民顕彰会代表の西山博文氏、三木市文化財保護審議会の宮田逸民氏、三木古文書塾の皆様にも末筆ながら感謝申し上げます。

本稿骨子は、2017年度人文地理学会大会(於：明治大学)にて発表した内容に加筆修正したものである。

〈注〉

- (1) 「三木市の概要」(<http://www.city.miki.lg.jp/profile/gaiyo.html>)2019年1月5日閲覧。
- (2) 都市分類は、総務省による「平成18年度地方財政白書」による。(http://www.soumu.go.jp/menu_seisaku/hakusyo/chihou/18data/index.html)2019年1月5日閲覧。
- (3) 昭和26(1951)年に三木町と美囊川対岸の久留美村が合併して三木町となり、同29年に三木町、別

三木の「義民伝承」について(1)(長谷川奨悟)

- 所村、細川村、口吉川村、志染村が合併し三木市となる。同40年代に緑が丘などの新興住宅地が開発され、市内外からの転居者によって市の総人口が増加している。そのため、旧市街地で暮らしてきた旧住民、戦後に合併した地域の住民、郊外の新興住宅地の住民とでは、自分たちが暮らす〈三木地域〉をめぐる場所感覚(≒地元意識)が同様ではなく、多様な認識が形成されている。
- (4) 深谷克巳は、義民について「民衆社会の正義と幸福のために一身を犠牲にした者。とくに江戸時代についていう。民衆社会に降りかかる災厄を除くために一身を挺し、そのために犠牲になったものを広くさすが、とくに領主の非法に抵抗し一揆を指導し刑死した者を義民(義人)と呼ぶことが多い」とし、死んだ人間を神として祀る神観念(人神信仰)を一つの要素として成立するという。また、現在に至るまで、民衆の権利の伸長のために義民を祀る立場と、地域の統合のために祀る立場の2つの流れがあることを指摘する。Japan Knowledge『日本大百科事典』(<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000063230>)2018年12月5日閲覧。
- (5) 三木市市民協働課「夏の義民祭」(<http://www2.city.miki.lg.jp/miki.nsf/doc/B4898F21120C35F249256DC800213162?OpenDocument>)2019年1月14日閲覧。
- (6) 2017年12月におこなった義民顕彰会事務局担当者への聞き取りによる。
- (7) 昭和46(1971)年7月1日、同52年5月27日施行の「三木義民顕彰会会則」による。
- (8) 三木市有宝蔵文書とは、本要寺境内に町民たちが建設した宝蔵のなかで保管されている近世三木町の資料群である。地子免許の根拠として利用され続けた秀吉制札や歴代領主からの免許状などの他、多くの古文書や絵図資料が含まれており、三木地域の過去を考えるうえで貴重な資料群として位置付けられている。
- (9) 三木市有法蔵文書1号。
- (10) 三木城の周辺を囲うように付城を築いて兵糧攻めがおこなわれ「干し殺し」と称され、後の鳥取城や高松城で実践される広範囲な包囲網作戦の初見として位置付けられる三木合戦については、三木市教育委員会(2012・2013)などを参照されたい。
- (11) 在郷町とは、代官・群奉行が支配する農村部に成立する商工業者が集住する地域をさす。
- (12) 三木市有宝蔵文書63号。
- (13) 三木市有宝蔵文書5号。
- (14) 三木市有宝蔵文書5号、同8号。
- (15) 三木市有宝蔵文書573号。
- (16) 三木市有宝蔵文書。
- (17) 三木市有宝蔵文書には、「三木町弁証碑銘写」(三木市有宝蔵文書38号)と称する碑の写しが残っている。
- (18) 「宝蔵」という名称、そしてここに収められた制札と古文書は、地子免許維持の証拠物件であり、都市三木にとっての「宝」であるという当時の認識を示すものであると、渡辺(2004)は指摘する。さらにこのことが、その重要性を住民に認識させ、「創られた伝統」の「制度化」に寄与すると同氏は指摘している。
- (19) 三木市有宝蔵文書40号。
- (20) 三木市有宝蔵文書41号。
- (21) 三木小学校児童を引率していた教諭への聞き取りによる。
- (22) 玉置家文書は、平成13(2001)年に三木市へ寄託された文書群である。玉置家と玉置家文書の地域歴史資料としての価値については、三村(2015・2016)などを参照されたい。

- (23) 過去の洪水の記録(昭和7年)、兵庫県県土木整理部作製、兵庫県 CG ハザードマップ (http://gakusyu.hazardmap.pref.hyogo.jp/bousai/kouzui/history/1932_07.html) 平成31年1月15日閲覧。
- (24) 神戸又新日報はデジタルアーカイブス化されており、神戸市立中央図書館で閲覧できる。
- (25) 三木市有玉置家文書49-90。
- (26) 三木市有玉置家文書75-452。
- (27) 慰霊碑に刻まれた碑文は、三木市教育委員会(2016)21頁を参照されたい。
- (28) 三木市有玉置家文書99-1426。
- (29) 三木市有玉置家文書77-103。
- (30) 三木市有玉置家文書75-137。
- (31) 三木市文化財保護審議会委員で郷土史家の宮田逸民氏は、このように主催者が変更されるにいたる社会的背景の1つには戦後の政教分離の煽りを受けた可能性を指摘している。
- (32) 義民顕彰会以前の状況について、顕彰会の本長寺代表を勤められている、元市職員の西山博文氏によると、義民祭などの活動を支援する担当部局は、市役所内の組織編成の変更などにより、これまで何度か変遷してきたという。

〈参考文献〉

- 伊賀はなゑ 2016.「播磨国三木町地子免許特権の再検討—地子免許状と町の構造を中心に—」歴史と神戸55-6、1-16。
- 岩橋清美 2010.『近世日本の歴史意識と情報空間』名著出版。
- 上杉和央 2009.「記憶のコンタクト・ゾーン」洛北史学11、47-72。
- エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー(前川啓治・梶原景昭訳) 1992.『創られた伝統』紀伊國屋書店。
- 桑田優 2010.『伝統産業の成立と発展—播州三木金物の事例—』思文閣出版。
- ケネス・E.フット、和田光弘訳 2002.『記念碑の語るアメリカ—暴力と追悼の風景—』名古屋大学出版会。
- 小坂恒三郎 1934.『三木町水害誌』三木町役場。
- 米家泰作 2005.「歴史と場所—過去認識の歴史地理学—」史林88-1、126-158。
- 羽賀祥二 1998.『史籍論—19世紀日本の地域社会と歴史意識—』名古屋大学出版会。
- ピエール・ノラ(谷川稔訳) 2002.『記憶の場—フランス国民意識の文化=社会史—』
- 福本錦嶺 1989.『三木市の史跡と寺社仏閣』三木市老人会連合会。
- 保坂智 2006.『百姓一揆と義民の研究』吉川弘文館。
- 三村昌二 2015.「価値を蓄積し続ける地域歴史資料—兵庫県三木市・旧玉置家文書を事例に—」歴史学評論783、78-87。
- 三村昌二 2016.「近代日本社会における「名望家」の歴史的位置—兵庫県美嚢郡三木町玉置家を事例に—」人民の歴史学209、15-29。
- 三木市教育委員会 2012.『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書 統括編』三木市教育委員会。
- 三木市教育委員会 2013.『三木合戦を知る』三木市教育委員会。
- 三木市教育委員会 2016.『三木の石造品Ⅰ』三木市教育委員会。
- 渡辺浩一 2004.『まちの記憶—播州三木町の歴史叙述—』清文堂。